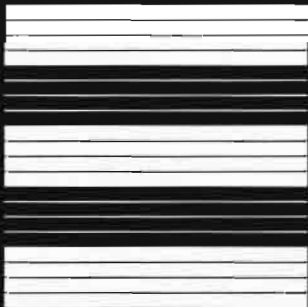


歴史のうずの中で 建築の1950年代 コートハウスの行方 西澤文隆のパラダイスはどこに



西澤文隆 (にしばふみたか)

1915年滋賀県に生まれる。1940年東京帝国大学工学部建築学科卒業後、坂倉準三建築研究所に入所。1943～46年フィリピンに渡る。1948年坂倉準三建築研究所大阪支所長。1969年株式会社坂倉建築研究所代表取締役。1985年株式会社坂倉建築研究所最高顧問。1986年心不全にて死去。
 <主な作品>塩野義製薬中央研究所(61)、芦屋市民会館・ルナホール(69)、大阪府総合青少年野外活動センター(71)、ホテル・パシフィック東京(71)。
 写真提供/坂倉建築研究所

当時、「たった80坪の敷地」にでも、外周に空地を設けず敷地を囲い込む方法で平屋を建て、その中をモデュロールを使って豆腐を切るような単純なラインで区切り、複雑な生活空間を実現させた上で庭を取り込んでいったプランニングスタイルがある。西澤文隆を中心とした坂倉準三建築研究所大阪支所*1の設計によるこのスタイルの住宅群は、「コートハウス」と称し、正面性をその外観にもとめないため「正面のない家」として発表された。

今回、コートハウスがこの時代に生まれた背景と坂倉準三という当時のスター建築家が率いる組織事務所の中で西澤文隆の個性が強く反映されたコートハウスがどのようにして事務所の共通語として消化されていたかを、著作とインタビューで追う。

坂倉準三との出会い

「1940年の春、ただ一人の所員として入所した。ある日坂倉は微笑しながらいった。『丁度植物と同じように建築も一つの有機体であるから、どこを切っても汁の出るようではなければならない』と。」(西澤) また、'40年卒業設計要旨の中でも当時の様子を「建築界はレーモンド詳細図集とコルビュジェ作品集をデザインソースにインターナショナル一辺倒の時代」(同)に「出征する兄の入隊祝い金をもらい受け『数寄屋建築図集』を入手し日本建築の空間の入り組みの面白さを勉強し始めた。」(同)とも述べ、後に「実測」へ傾倒していく発芽を見せている。そして、建築家としての住宅への貢献を「最小現住宅の問題は少なくとも現今最も緊急な問題であろうが。(中略)…従って人間の真の生活は少なくとも必要の域を脱しなければならぬ。香気ある生活を！それを考えている。」(同)と述べ、ポスト最小現住宅への気炎を持って卒業したことがわかる。こうして後、西澤はマニラでの文化会館建設でフィリピンへ渡るなどして太平洋戦争をくぐり抜け、'46年に帰国。戦後の苦境から脱するにつれて、任された大阪支所の仕事の中で、徐々にコートハウスをキーワードにした住宅設計を実現させていく。

インタビューにむけて

西澤は、著書「コートハウス論」をはじめ、各誌に多くの著述を残しているため、当時の筆跡を追いながら、一方、今回、当時の

坂倉事務所の様子を知る阪田誠造氏('51年入所。株式会社坂倉建築研究所最高顧問)と、大阪支所で西澤とともに多くのコートハウスを担当した太田隆信氏('58年入所。同代表取締役)にお話を伺った。

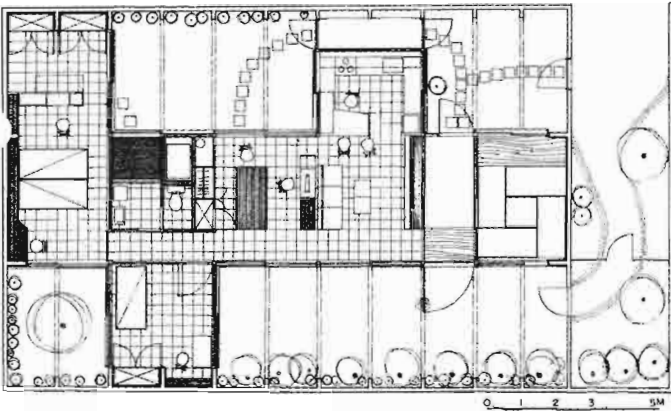
—— '50年代の印象をまずお聞かせいただきます。
 阪田 '50年代のはじめと終わりではずいぶん印象も違う。はじめの頃は被災復興が中心で、東京の空襲の焼けビルをGHQが接收して、そのビルを使うための改修の仕事が山ほどあった。設計事務所に入っても他には殆ど仕事が無い時代でした。僕は'51年に坂倉事務所に入ったんですが、当時は15坪以上の住宅が建てられない時代でした。当時の事務所では、坂倉の生家がある岐阜県羽島市の酒蔵の酒樽廃材を利用した製図台を事務所内で製作したり、戦時中からの組立式住宅をさらに発展させた設計が試みられる程度でした。'50年代後半に至りようやく本格的な新しい住宅始め、建築が設計できるようになりました。住宅も所員がこぞって心血を注ぐという状況でした。'48年に、坂倉さんが大阪に仕事を得た機会から、西澤さんが支所長として大阪の坂倉支所を開きました。坂倉は自分に依頼された仕事はどんな仕事にも自身が目を通し、スタッフは責任をもって計画の初期から監理まで一貫して作っていく風土が事務所に定着していました。後に西澤がコートハウスなど西澤色の強い設計が実現するのは、西澤さんに依頼された仕事をするようになる60年代以降からです。僕が入所して1年以内に、クラブ関西の仕事で大阪に一月ほど行ったときに西澤さんに接しました。大阪支所は帽子会館の薄暗い1階の1室が事務所、お昼は石炭ストーブでアゲ入りのうどんを煮て、皆で食べていました。栄養不足の補いに、西澤さんが皆にビタミンの注射をするので、朝からビタミンの匂いに随分悩まされました。

—— そういう時代に住宅であれ、何であれ仕事を選んでいた…。

阪田 いや、ある仕事はみんな一生懸命にやっていました。仕事が少ない、一つの仕事に全エネルギーをかけて楽しんでいたのかも知れません。決して暇ではなかった。あまり成果が違わないようなこと、たとえば障子の棧の割り付けだけを何枚も図面を描いたりです。



1



3



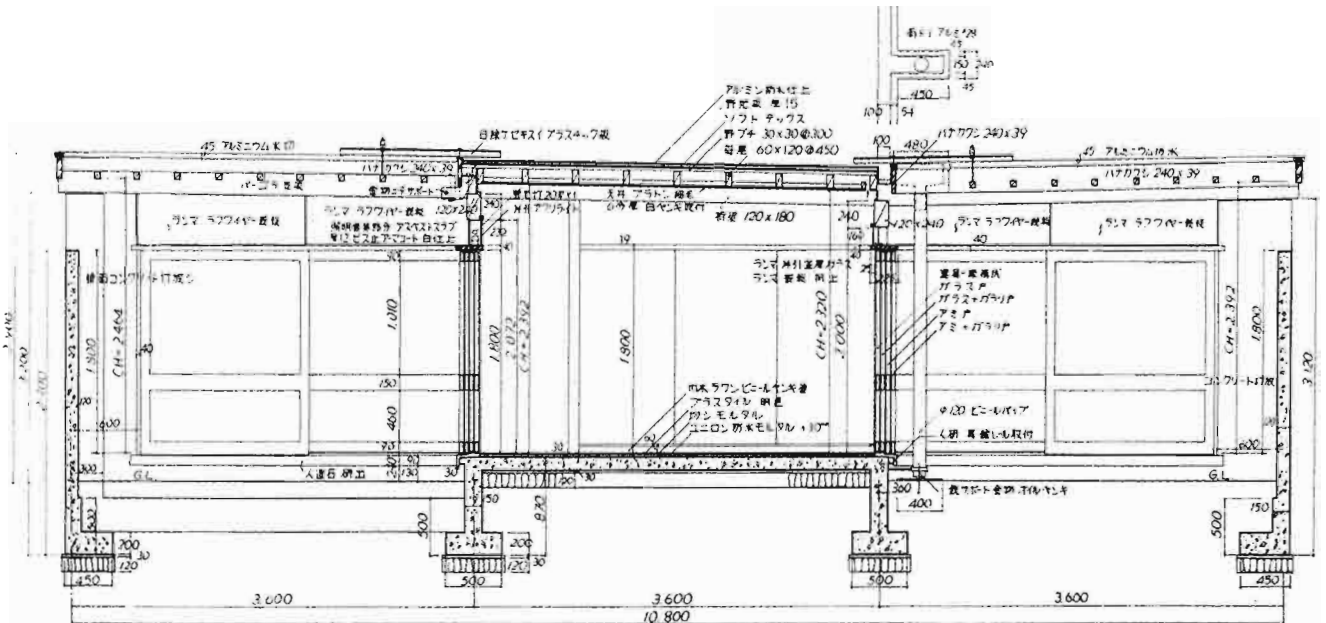
2

1. 正面のない家H邸（'62・西宮市）
コンクリート打ち放しの道路側外壁
2. 同 中庭とバーゴラ
3. 正面のない家N邸（'58・西宮市）平面図
4. 同 矩計図
5. ブーゲンビレア（bouganvillea いかだ
かづら）スケッチ 『フィリピンの花達』
から（'43～'46）西澤文隆筆

写真1・2 多比良敏雄提供



5



4

歴史のうずの中で

コートハウスへの私の遍歴

- 1940年 古川邸案
パティオをもつ2階建て煉瓦造住宅
- 1943年 龍村邸
東西に大きく妻屋根をかけ中庭をえぐり取った。中庭南北の翼に中2階がかかる。
- 1947年 上村松園邸
中庭をつくり北側に増築。増築部分と旧館と渡り廊下でつないだ。この反対側は竹のトクサ張りとし、サービスヤードを区切った。完全に眺めるパティオである。
- 1947年 白雪ビル
中庭を中心に廻廊でつながれた貸事務所。
- 1950年 西武商店
南北に長い敷地。京都の町屋を念頭に置いて造ったもの。
- 1951年 料亭『泉』
互いのぞかれる部屋部屋を敷地全体にばら散き、その間に眺める庭をちりばめて日本的な空間を出そうとした。
- 1958年 仁木邸 (N邸)
東西に狭く南北に長い狭隘・きょうあいな敷地を与えられ、初めてコートハウスと取組む。
- 1959年 宮本邸
南北に長い敷地。建込んだ町中で狭隘な敷地を100%利用することに全力を上げた。屋上という屋上はすべて緑で埋め尽くした。
- 1961年 楠本邸 (K邸)
庭が少し広いので庭と家のバランスを半々にした。客間と居間の間につくられた空間は池にする予定であったが、最後になって施主の家相上の希望で乾いた池となってしまった。この家では運転手の家族を入れて2戸建てを1戸に組み込んだ。
- 1962年 喜多邸
狭い敷地であり、東西に高いアパートが聳えている。西宮北口の空地は何が建つかかわらない。中央の煉瓦敷きのパティオは現在子供の遊び場である。
- 1962年 平野邸 (H邸)
これも狭い敷地。池にはいずれ所狭しと水草が覆われるはずである。西側に少しでも広い庭を取るため、外壁を窓のあるファサードにしてみた。

(新建築'62年10月号コートハウス論)

() 内は筆者挿入

— コートハウスの基盤は西澤さんが—

阪田 西澤さんに直接依頼される住宅の仕事が多くなってから、西澤さんの色合いが強くなるようになり、コートハウスが注目されるようになりました。コートハウスに続いて青少年センターなどは、坂倉さんは余り口を出されていなかったように思いますね。

プランニング手法としてのコートハウス

戦後から高度成長への橋係りの時期50年代の後半から西澤はコートハウスへの野望を確実に育てていく^{*2}。その念頭には光があふれる親密な空間としての「パラダイス」(paradise^{*3})への単純なあこがれのようなものがあつたように感じるが、西澤は「コートハウスの根元がパティオ(patio)に出発点をもったとしても、現在コートハウスを採り上げる所以のものは中世の中庭(chiostro)の如きものの再現を目指しているのではない。『緑と住生活の密着度をいかにして高めるか』『いかにして住空間にプライベートなオアシスをもたらすか』というのが主要目的であるということ、もうすこしははっきりと表現してみたいと思う所以である」と述べ、初めにコートハウスありきプランニングかなどとの安易な邪推に釘を差し、あくまで、クライアントの要望を聞きながら答えを探していった結果だという。また、大阪支所の仕事を取りあげた当時の記事の中で、コートハウスの作品として'58年の坂倉建築研究所大阪支所や'59年の心斎橋アーケードなどを取りあげ、コートハウスの考え方が坂倉事務所の仕事の中で住宅以外にも実っている^{*4}と認識し、コートハウスが西澤特定の言語としてだけでなくの大阪支所の共通語としてはぐくまれたことがわかる。

なぜコートハウスか？

'61年に「正面のない家」(N邸)の発表後、盛り上がるコートハウス論争の中で「なぜコートハウスか」との問いに西澤は、「現代の日本のように貧しい社会では80坪ばかりの狭隘な土地にわが孤域をつくらんとするに何が誤りであろうか。外観から完全に遮断され、自然に溢れたプライベートな住空間こそ、人間の住まいでなければならない。狭隘な敷地の中で、エアコンディションの完備できない状態にあつては、互いにプライバシーを保ちながら自然の風を入れ、緑の中に広く暮らすためには、コー

トハウスこそまことに適当な一つの解決法であるまいか。」と述べている。

これにより、近隣に対して背を向けるように敷地いっぱい壁を立て、籠もりながら中でパラダイスをつくらんとする個人主義的なクライアントの志向や「80坪」を「狭隘な敷地」と呼ぶ当時の住宅地事情をコートハウスが現れる時代背景として知ることができる。

こうして、狭隘な敷地を住みこなす都市型住宅のひとつの答えであるが、「コートハウスは1つや2つではつまらなくて群落をなしていたほうがいい、しかしそれが一面に広がっていると窒息しそうになるから、群落をなしながらばらまかれていた状態がいちばん望ましいでしょうか。」(西澤)と、このスタイルの汎用性を認めながらも絶対解でないことも自認している。

当時、戦後の人口増に備え住宅公団が庶民に対して巨量の住宅供給を画し、一方で建築家の最小限住宅やスカイハウスなどの実験的モダンハウスへの試みがなされる中で、外の世界から隔絶して、ここまで庭との関わりを掘り下げた住宅はなかったのではないか。それはあえてアンチピロティを標榜したものではないが、結果的にピロティとは逆に埋もれるように大地に伏した形をして、プランニングは思いっきり内向している。これは、近代建築の新しいスタイルを求める一方で、緑魔とも自称するように、西澤の身近な土の香りや木々小花への親密度^{*5}が異常に強かったことや、外に対してなるべく存在感を消してみたいとの志向があつたからではないだろうか。

田園の中の裕福な屋敷に生まれ育ち、旧制三校時代に典型的な京都の町屋で暮らした西澤は、伝統的な日本の空間を身をもって体験しているから故、エキゾチックなパラダイスを夢見たのであろうし、コートハウスの自己完結した閉ざされた世界をつくってみて、その中でいかに庭と室内を等価し日本的に空間を透かそうかと試みたのであろう。

コートハウスの増改築

宝塚のK邸('61)に関しては、後の増改築('68)の折に「設計初期の段階で増改築を見込んだフレームワークをつくること、また、増改築によって損なわれることなく、否むしろ増改築をもその中に包含するような空間をつくること」が設計に当たった目標の

ひとつであった。」(太田)と述べられていうように、コートハウスが「敷地全体を生活空間として分割思考していくので、空間の可動性を、ビジュアルなものにしてくれる」(同)と、プランニング手法とフレームワークの構築が連動して行われていたことに設計の深度を感じ、近頃のリフォームブームへも一石を投じる一面ではないかと感じる。それ故、当時の設計密度に関しては「家は心身を休める所だから全然抵抗もなく住める家が良い。設計料は住宅の場合、労働とにらみ合わせると非常に安いものだから、ぜひ建築家に頼んで思いつく事は何でも遠慮せず伝えて、自分を十分建築家にわからせることが大切だ」(西澤)と語るようにここを切っても汁が出るような推敲とディテールを1軒ごとに構築していくエネルギーには敬服するものがある。これは今年度の企画取材を通して'50年代の他の名建築を見ても感じることで、設計料デフレの中、職能への自信喪失や戸惑いなど小さな切り傷と思え力を得たことは幸運であった。

実測と自邸

一連のコートハウスが発表されて後、'67年ごろから建築と庭園の「実測」作業が始まり後、自邸('80)において、「簡単に締めて出られるような」、そして「オーディナリーな家」を設計することとなる。敷地条件の違い、住み手の要望をあわせての自邸の答えがそれであった。

を取り込んだコートハウスには自然との親密な共生があるが、一方で真近い距離で自然を馴化させる多大なエネルギーが必要であろう。それは遠くから眺め愛でるだけの景色ではないからだ。400坪を越える敷地の中で自分を含有する「家」は、自然を敵に回したまさに要塞のようである。西澤の自邸におけるパラダイスはいったい何であったのだろうか。

西宮のH邸、宝塚のK邸をたずねて

企画柄、'50年代に計画されたコートハウスを探してみたところ「正面のない家N邸」(西宮市)が残念ながら現存せず、同じ流れを汲むと考えられるK邸('61)とH邸('62)を訪れる。

K邸⁶⁾は、100~200坪に分割された当時の典型的な阪神の「文化住宅地」。背面の公園越しに六甲山系が続く、今も閑静な住宅

街で、あまり廻りの状況は変わっていないように見受けられる。現在もファサードはほぼ当時のまま、建物を突き刺すようにあった高木の一部が姿を消し、道路側以外の廻りの塀兼外壁の三方には上に高く防犯用のネットフェンスがとりつけられている。H邸⁷⁾は、当時の記述で「周囲に建蔽率違反に近い2階建てが建て込んでしまい…」とあるが、今見るとそれらの建物のほとんどが建て変わったようだ。建て込み感はより一層増していて、今でこそコートハウスが効果を発揮しているようである。しかし、逆に廻りからこのH邸を見ると、ここだけポカンと家が低く伏しているため、廻りの建物にとっては日当たりと眺望が効く。現在こうして近隣と隔絶して内向したコートハウス自身が近隣にとっての中庭の役割となって廻りに好条件をもたらしているのは皮肉である。

どちらも期せずして住み手が変わっていながら当時の面影が非常に濃い住まい方の方である。当時両方ともにあった女中室の扱いのみは興味の残るところであるが…。

(稻上文字)

最後に、ご多用の中、お時間をいただきました阪田誠造さんと太田隆信さんに感謝いたします。

(阪田氏インタビュー 2003.8.2 NAISミュージアム、太田氏インタビュー 2003.8.21

坂倉建築研究所大阪支所にて
聞き手：本誌編集委員 奥村由和・稻上文字)

注釈

- *1 現在の坂倉建築研究所
- *2 コートハウスへの私の遍歴参照
- *3 エジプト人が呼んだ囲われた空間のこと(西澤)
- *4 阪南高校写真
- *5 フィリピンの花参照
- *6 敷地287㎡建蔽率49.5%
- *7 敷地530㎡建蔽率32%

参考文献

- 『コートハウス論』西沢文隆著 相模書房
- 『家』石井修、西沢文隆、出江寛、水谷頌介著 学芸出版社
- 『日本の住宅戦後50年』布野修司編 彰国社
- 『素顔の大建築家たち01』都市建築編集研究所編 建築資料研究所
- 『建築』高木民夫発行(1963.3、1965.7)
- 『新建築』新建築社(1961.1、1962.1、1962.10、1963.10、1964.2、1969.5)
- 『建築評論』建築評論社(1971.2)
- 『建築知識』建築知識(1977.7)
- 『こすもす』(1975.1)
- 『花』129・130号(フラワースサエティ)

参考HP(2003.8)

坂倉建築研究所HP、阪南高校同窓会HP、松下電工NAISミュージアムHP



6. 正面のない家H邸('62・西宮市)現在の外観道路側正面と全景
7. K邸('61・宝塚市)現在の外観道路側正面
8. 阪南高校('58起工)玄関廻りのピロティ二階に動線を集めたクラスタースタイル(房状配置)の校舎で親密な中庭を感じることができる。坂倉準三の香り漂う大阪支所の作品。

6

7

8